

自由論題 I 文学II

I 文学II〔自由〕 10月26日(日) 13:00-15:00 23号館205

座長：白水紀子(横浜国立大学)

報告1：神谷まり子(国士舘大学)

『九尾亀』から『九尾亀続集』へ——理想のヒーローとミソジニーの女性表象

報告2：奥野行伸(佛教大学非常勤講師)

南京時代の路翎

報告3：近藤光雄(一橋大学大学院)

『巴金文集』(1958~1962)における注釈の意味

報告1：神谷まり子「『九尾亀』から『九尾亀続集』へ——理想のヒーローとミソジニーの女性表象」

要旨：張春帆『九尾亀』(1906-1910)は、清末花柳界における遊客と妓女の交遊を描いた長編小説である。その悪名を後世に印象付けたのは、魯迅が『中国小説の歴史的変遷』および「上海文芸の一瞥」(『二心集』)で醜悪化した妓女を描いた作品と紹介し、この種の小説を「才子+ゴロツキ」を主人公とした「嫖学教科書」として言及したことがきっかけだと考えられる。そのため『九尾亀』は当時再販を重ねたベストセラーであったにも関わらず、韓邦慶『海上花列伝』と比べ低い評価しか与えられず、また同じ著者による『九尾亀続集』(1918-1925)については、現在の近代通俗文学史などでもほとんど詳述されていない。

しかし、『九尾亀』と『九尾亀続集』を一つの作品世界として詳細に読み比べてみると、以下の特徴が浮かび上がってくる。一、『九尾亀』の女性像が名妓たちの金目当ての詐欺行為を中心に描かれるのに対し、『九尾亀続集』では花柳外の女性たちの様々な行動も描かれるようになったこと、二、主人公の章秋谷が、世間への鬱憤を抱えて花柳に遊ぶプレイボーイから、辛亥革命後の軍政府で要職を務める、文武両道の男性像へと変化することでヒーロー性がより強まったこと、また、三、『九尾亀続集』において民初の政治社会情勢など妓楼外での描写が増えたことにより、空間、内容面においても多彩な広がりを持つようになったこと、などである。

本報告では『九尾亀続集』を民国初期の社会小説のジャンルと比較、検討するとともに、両集で男性の存在を脅かす恐ろしい悪女として描かれるその女性像を、男性登場人物たち(および作者、読者)の社会への不安感を投影させた女性嫌悪(ミソジニー)の表象として分析し、彼らの願望を反映する章秋谷がフィクショナルなヒーローとして描かれる点と、それらが提示する新たな女性像の可能性について考えてみたい。

報告2：奥野行伸「南京時代の路翎」

要旨：路翎(1923~94)は「七月派」を代表する作家である。彼の主な創作期間は、1940年に胡風の推薦を受けて発表された処女作「要塞」退出以後から、胡風事件で逮捕され

自由論題 I 文学II

る55年までの15年間である。この期間をさらに三つに分けると以下のようなになる。第1期は、抗日戦争中に雑誌『七月』で文壇デビューを果たし、長篇小説「財主底兒女們」を執筆して作家としての地位を確立した重慶時代。第2期は、抗日戦争後、重慶から南京に戻り、小説のみならず「雲雀」などの劇作をも執筆した南京時代。第3期は、人民共和国建設後、北京に移り住み、「初雪」「窪地上的“戦役”」などを朝鮮戦争従軍の経験に基づいて執筆した北京時代である。本発表では、1946年以降の南京時代の活動を対象とし、その足跡を辿ってみたい。そして、彼の実生活が作品にどのような影響を与えたかを指摘したい。具体的には、「国統区」（国民党支配区）南京での生活体験（インフレ、食糧・住宅難など）が、作品にどのような影響をもたらしたかについて、まずは明らかにする。次に、文学史の面から眺め、舒蕪「論主観」や胡風「置身在爲民主的闘争里面」の発表によって、一部の作家から「七月派」の作品が唯心主義的傾向にあるとの批判が出始めた時、これに対して路翎がどのような態度を取ったか、考察する。さらに、「七月派」のこれまでの創作活動を踏まえた上で、47年4月より路翎が本格的に話劇の創作を始めた理由を書簡や回想文などの資料から明らかにしたい。最後に、路翎は1949年に主題や視点等がこれまでの作品とやや異なる「女工趙梅英」を書いているが、この作品にも目を配り、作風の変化を生んでいった過程を分析したい。以上、これらの考察を中心に据え、国共内戦という混乱期に南京で執筆を行った路翎を通して、「国統区」における作家活動の一側面を探っていききたい。

報告3：近藤光雄『巴金文集』（1958～1962）における注釈の意味

要旨：1957年、各界の知識人を巻き込んだ「反右派闘争」が国家レベルで展開された。文学界においては、政治イデオロギーに支えられた新たな文芸政策が進められ、作家たちは否応なしに世界観、文芸観、人間観の改造を迫られた。ちょうど同じころ、巴金は人民文学出版社から『巴金文集』を出版する機会に恵まれ、その編集作業に着手した。そして翌1958年から1962年にかけて、『沫若文集』、『茅盾文集』、『葉聖陶文集』とほぼ時期を同じくして、『巴金文集』全14巻が相次いで出版された。

知識人の自己改造が求められた時代において、自由主義的傾向にあった作家、とりわけ巴金のようなアナーキズムを信仰した作家が、旧作を集成し『文集』として出版すれば、批判に曝されることは容易に予想されよう。では巴金は、それにどのように対処しようとしたか。筆者は、『巴金文集』全14巻に施された注釈に注目したい。

ここで言う注釈とは、たとえば言葉の意味、人物の経歴などを説明する、辞書的な役割を果たすものではない。ほとんどのものは、巴金がかつて信奉したアナーキズムに関わらせて、当時の思想や立場を表明するという形で施されている。数はそれほど多くはないものの、作品に織り交ぜながら、日付付きで、読者に伝えるところがポイントである。本発表ではまず、いつ、どの作品に、どのような内容の注釈が施されたかを明らかにする。そこから更に、巴金は自己改造を契機に、予想される批判を回避する内容と、読者の閲読行為に作家自らが介入する形式という、二つの側面を兼ね備えた注釈を施すことで、読者とどのような関係を築

自由論題 I 文学II

こうとしたか、考えてみたい。